

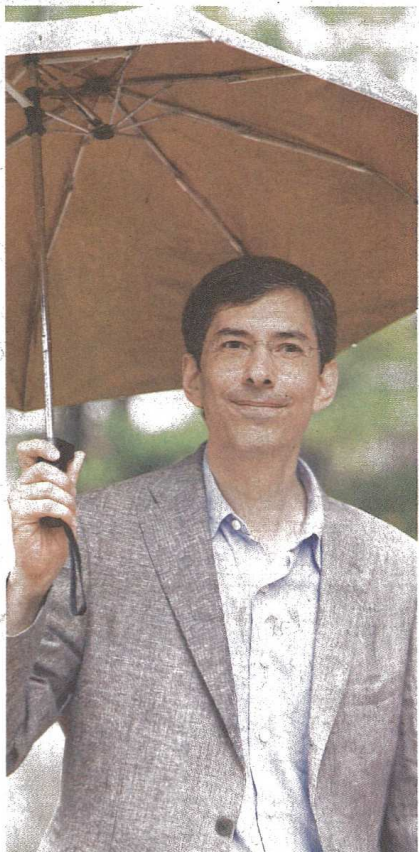
日本研究賞にエドワード・マークス氏

民間シンクタンク「国家基本問題研究所」（櫻井よしこ理事長）の寺田真理記念・日本研究賞の第2回授賞式が7日、東京都内で行われ、愛媛大准教授、エドワード・マークス氏（52）が受賞した。同賞はすぐれた日本研究を顕彰している。

マークス氏は日系の彫刻家、イ

サム・ノグチの母で米国人のレオニー・ギルモアを研究し、その独特の教育観や日米にまたがる人生を著書で描いた。

また米ハワイ大教授のデイヴィッド・ハンロン氏が、マイクロネシア連邦初代大統領となった日系人、トシヲ・ナカヤマの研究で奨励賞を受賞した。



（寺河内美奈撮影）

きょうの人

この母なくして20世紀の世界的な彫刻家、イサム・ノグチはなかっただろう。著書「レオニー・ギルモア イサム・ノグチの母の生涯」で、天賦の才能を引き出した米国女性の、数奇な生きようを描き出した。「イサム・ノグチや野口米次郎について調べると、レオニーという女性に興味をひかれずにいられない。この本は米次郎の研究から派生したもののなのです」

野口米次郎とは100年以上前に米国で、英語詩や小説を発表した日本人文学者。英語の校正者として雇ったのが、のちにイサムの母になるレオニーだ。米次郎は女性関係が複雑でレオニーは結局、教師などしながら女手ひとつで息子を育てることになる。母は日米混血の息子の将来を心配し、国籍などに関係ない芸術家にさせようと考えた。

イサム・ノグチの母に魅せられ

日本で家を建てたときには大工らの手伝いをさせ、13歳になると米国のアート系の学校に入れると決めて送り出した。医学の道に進みかけると芸術に引き戻す工作さえした。「奇妙といえるほどですが、非常に意志が強い人だった」

著書では手紙などを通し、日米をまたいで生きた女性の内面に迫る。文章の意味を読み解く作業は根気のいるものだったという。

「受賞を機に、このような學術本に少しでも関心が向けられればと思います」

いまは米次郎の伝記を執筆中という。青年時代を米国で過ごし、英語圏の文学者に影響を与えるほどになったこの人物も興味深い。ニューヨーク市立大大学院に在籍中、本格的に研究を始めたという。

俳句をきっかけにした松山での生活も10年以上になる。妻は日本人。研究対象と同様、自らの人生も日米にまたがる。

（坂本英彰）